第 22 回縮小社会研究会の報告

講演会参加者：58 名、懇親会参加者：32 名
時：2014 年 5 月 17 日，13 時 30 分-17 時、　所：京都大学農学部総合館 W106

世界も日本も経済成長を目指しています。一方、我々は縮小を目指しています。ここで、経済成長の何が問題なのか、何が悪いのかを明確にする必要があります。今回は、経済に視点をあてて議論します。縮小経済学なるものを作りたいものです。

講演会

13：30-14：10　「環境経済論－南東アラスカの木材生産にまつわる生態系保全をめぐる対立の歴史と今後の展望－」　奥田郁夫（名古屋市立大学）

予備知識として、環境経済論で取り扱われる研究内容について、おおよそのところをご説明した上で、その一分野である生態系保全をめぐる議論について、南東アラスカにおける木材生産を事例としてお話をします。

14：15-14：55　「フレデリック・ソディの貨幣論と縮小経済の気掛かり」　大谷正幸（金沢美術工芸大学）

下村治の経済成長論、フレデリック・ソディの貨幣論、デヴィッド・コロウィッツの崩壊論等を参照しつつ、成長を前提とした金融の仕組みとエネルギー制約ゆえにモノの次元で成長し得ない現実との齟齬について考える。

15：00-15：50　「非正統派経済学で縮小社会を考える」　宇仁宏幸（京都大学）

現代の経済理論は、正統派と非正統派とに大きく別れています。正統派は「新古典派」と呼ばれ、「市場原理主義」と形容されることもあります。この正統派経済学は、極端に単純化した非現実的な諸仮定から理論を組み立てているために、また制度や歴史を無視しているために、現実の経済を説明する能力がほとんどありません。リーマンショックに始まる世界金融危機の原因は、正統派経済学に基づく金融規制緩和政策にあることもよく知られた事実です。したがって現実と直面している実務家、政策担当者、経営学者、会計学者、経済史研究者などは、正統派ではなく非正統派経済学に基づいて、ものを考えていることが多いです。非正統派経済学は、制度や歴史を重視し、仮定や理論の現実性を重視する経済学です。

ところが、残念なことに、大部分の経済学の入門レベル教科書や一般向け経済書は、正統派経済学に基づいて書かれています。そのために経済の専門家以外の方々には、正統派経済学の方が流布しているという現状があります。縮小社会研究会の会員の皆様も、おそらく非正統派経済学についてはほとんどご存じないと思います。経済の成長にしても、経済の縮小にしても、企業や家計の行動にしても、経済政策にしても、正統派経済学で考えると、現実妥当性を欠くおかしな説明になってしまいます。非正統派経済学の立場から、経済の成長と縮小はどのようにとらえられるかについて、また縮小社会において必要な経済政策について、お話しします。

16：00-17：00　討論

17：30-　懇親会